

京都学園大学地域連携プロジェクト

放送を活用した住民と学生による 地域再発見

近 藤 晴 夫

はじめに

京都学園大学にはプロの放送局にひけをとらない放送施設がある。学生たちがメディアに携わるための育成、放送の知識や技術を実践的に学び、その成果が実社会に活かされることを目的に1999年に開設された。以来、ここから多くの学生が輩出され、マスコミ関係に就業し活躍している。その意は後輩たちに受け継がれ、京都学園大学放送局(GBS放送局)を中心に学園内でのテレビ・ラジオによる定期放送や外部からの委託、そして入学式・卒業式の中継と多岐にわたって活動している。

この放送施設を地域社会とのつながりのために活用して貢献できないかと考えていた。現在、大学の知的財産を地域社会へ還元することによる地域貢献、実践が求められている。すでに多くの大学では、地域貢献を積極的に行っている。本校でも市民を対象にした講演会、小・中学生を対象にした地域ふれあいサイエンスフェスタ、京都・丹波学生フォーラムなど多岐に関わっている。

その一環として今回、地域住民と学生とがタッグを組んで亀岡・丹波地域の話題を取材し、地域メディアを通して大学から発信していこうというプロジェクトを立ち上げた。京都学園大学スタジオ開設から11年を迎え、学生と市民との新たなコミュニティスタジオとしての活用を打ち出すことにした。

(地域メディアを活用した他大学の取り組み)

ここで大学が教育プロジェクト、あるいはゼミにおいて取り組んでいる、地域メディアを活用した地域貢献の番組制作の⁽¹⁾実践例を一部紹介する。

中央大学

「多摩探検隊」。松野良一教授(総合政策学部)のゼミ生が制作する「地域再発見番組」で2004年に始まった。企画から取材編集、パッケージ化まですべての作業を行い、その作品は多摩地域のケーブルテレビでレギュラー番組として放送されている。

また「子ども放送局」の活動も行っている。小・中学生が映像番組制作を行い、ゼミ生がサポートしている。作品は同じく「ケーブルテレビ」で放送されている。

東海大学

広報メディアを学ぶ学生を中心とした学生主体のプロジェクト。地域に密着したテーマを取り上げ、15分のドキュメンタリー番組を隔月30分、地元ケーブルテレビで放送。その他、地元民放テレビでの大学・学生を紹介する3分の広報番組制作。コミュニティFMでの30分番組制作などに取り組んでいる。

信州大学

2006年からテレビ松本ケーブルビジョンのチャンネルを使い1日13時間「信州大学テレビ」を放送。大学による放送事業としては日本初のテレビチャンネルをもつ。

番組内容は「ニュース・情報」「教養・生涯教育」「音楽・バラエティ」「ドキュメンタリー」と大学に関するあらゆる情報が自主番組として放送されている。制作する学生はゼミ生やクラブ生、制作に関心のある者でグループとして構成され、テレビ局からの番組制作の技術指導を受けている。

成蹊大学

NPO 法人が講師を務めるメディア実践教育を行っている。映像番組制作、ラジオ番組制作、ウェブサイト制作といずれも NPO 法人が実習の講師を務め、完成した作品は地元ケーブルテレビやコミュニティ FM、インターネットを通して発信されている。

いずれも地域コミュニティを意識した中で、学生が中心となって地元へ密着した番組制作を行い、その作品を放送という手段を用いて発信している。今回の本大学の地域連携プロジェクトの特徴は、学生と市民スタッフの協働で番組制作をすることにある。学生・大学側の一方的な視点ではなく、地域住民とともに立場、世代を越えて地域の魅力を掘り起こし、ラジオ番組を作り上げ発信していくことが大きな目的である。これが上記の大学の取り組みとは異なる点である。

概 要

地域連携プロジェクトチームを発足

参加者 学生27名

GBS 放送局、近藤ゼミ生、君塚ゼミ生、岡本ゼミ生、授業「スタジオ放送実習」の学生、地域との関わりに関心を持つ学生、大学院生。GBS は制作経験があるが、他は未経験に等しい

市民9名

大学 OB や口コミで参加した市民によってスタート。

同時に亀岡市民新聞で募集記事掲載。それを見て応募してきた市民で構成。

- 大学施設の放送機材を使用し、取材・制作・編集のノウハウを学ぶとともに学生と市民と一緒に15分のラジオ番組を作成する
- 取材対象は亀岡と周辺の丹波地域。知られざる一面や興味深い話題を紹介

介する

- 題材や内容は事前に学生や参加市民たちと議論を重ねる
- 作品は鑑賞会を開き評価を受けて、校内や公共施設で放送
- 優秀な7作品をKBS京都ラジオ「京都・丹波Do! たんばRadio」で放送
- 2010年秋10月から12月まで第1・3・5日曜日、午前10時35分～50分。15分番組

意 図

1 学生と地域住民の連携を高める

京都学園大学の学生たちは地元にながら、亀岡の地への意識は希薄で、市民との接点も学園祭を除けばあまりないというのが現状である。プロジェクト開始時に参加学生・市民を対象に行ったアンケート調査においても、ほとんどの学生が「機会がなかったから」「人づきあいが苦手だから」という理由で地域の人との関わりを持っていないと答えていた。大学の中だけという限定された人間関係を抜け出し、地域との接点を持つことで社会とのつながりを意識し、豊かな人間関係を築くことが可能となる。そこで若者と地域に根ざした市民とが手を取り合って、ラジオとテレビの制作に取り組み、作品作りに励むことの意義は大きいと考える。大学にある映像・音声ツールを使って、市民と学生が協働で取材しその記録を次世代に残していこうとラジオとテレビの番組制作を企画した。

2 大学と地域のイメージアップを図る

亀岡市には豊かな自然と、歴史ある都市としての誇れる文化がある。また世界連邦平和都市宣言をいち早く打ち出すなど先進的な役割を担っている。しかし、亀岡は保津川下りやトロッコ列車、湯の花温泉など一部の観光名所しか知られていないのが現状である。折しも2010年は光秀の居城で

ある亀山城築城400年を記念して町の活性が期待されていたが、今一つ盛り上がり欠けるように見受けた。亀岡・丹波の知られざる一面を取材し、魅力を近畿一円に流れるマス媒体にのせることで地域の情報発信能力の向上、イメージアップにつながる。

地域のコミュニティラジオとして知られる京都三条ラジオカフェ⁽²⁾では市内の大学生たちに番組を解放、学生たちが出演して、学生の活動を様々な視点で発信している。当大学は地理的にも京都市内から少し離れた場所に位置していることもあって学生たちの活躍の場は限られている。放送スタジオを持ち、メディアを専門的に学んでいるのであるから、その特性を大いに打ち出す必要がある。番組は企画段階から、取材・構成・完パケ(放送可能な状態)それにCMとすべて手作りであり、メディアリテラシーを育む実践活動である。今回のプロジェクトの活動を紹介することは大学のイメージアップにもつながる。

3 コミュニケーション能力を養いチームワークの大切さを学ぶ

社会に出て一番大切なことは、コミュニケーション能力とチームワークであると考え。番組制作は一人ではできない。グループワークを通じてコミュニケーション能力が養われる。特にこのプロジェクトチームにおいては異なった世代のコミュニケーションが前提となっている。これは学生にとって一番苦手なことである。また制作は根気のいることばかりで、その過程における企画や構成・取材・交渉などはあらゆる職種で役立つ能力の開発にもつながる。また番組が完成したときの喜び、達成感が自信につながる。

活動内容

〈地域連携プロジェクト立ち上げ〉

私と君塚洋一准教授(メディア社会学科)のもとで参加者を募り、チーム名

を地域連携プロジェクトとする。君塚先生に大学内の番組立ち上げにおける交渉を依頼し、全体プロデュースは私が担当。大学側の理解を得てバックアップ体制が整ったことにより2010年1月にスタートすることができた。

〈企画会議〉

第一回の会議で番組タイトルと年間24本の企画案を提示。そのうち16本を制作。月2回のペースで会議を開催。主に取材内容における意見交換。取材担当者の割り振り。進捗状況などを報告する。

企画案

- 1 ジョン・レノン 湯の花温泉旅行にまつわるエピソード
- 2 亀岡祭と祇園祭の深いつながり
- 3 3年間予約いっぱい料亭、その人気の理由は？
- 4 ハチ博士の昆虫記(研究内容とハチ予防策)
- 5 知学地消で全国に発信 京都府立農芸高校
- 6 ある時期、大学のバイオ館が消える！
- 7 亀岡は映画スポット
- 8 謎解き？ 亀岡の方言、あなたはわかるか？
- 9 保津川検定(クイズチャレンジ形式)
- 10 亀岡はなぜお寺が多いのか？
- 11 亀岡のおせち料理はちょっと違う
- 12 亀岡の妖怪と幽霊探訪スポット(そろばん小僧……)
- 13 あなたも歴史上のヒーロー・ヒロインに？ 甲冑は手作り(光秀祭)
- 14 鯉のぼりを揚げない町・大井町
- 15 亀岡のバリアフリー

そのほか美山町の茅葺、障害施設で働く人々の紹介や寺坊における市民活動の取り組み、亀岡の夏行事などの企画が提案された。

番組制作の過程における主な流れを下記の要項にして提示した。

番組取材・編集・OA と制作過程における主な流れ

- 1 素材を見つけ企画を提案
- 2 企画書を提出，会議で説明・検討
- 3 スタッフを決めリサーチ
- 4 取材先等の交渉
- 5 取材スケジュールを立てる
- 6 構成
- 7 取材・収録開始(取材先，名前等の確認)
- 8 取材・録音チェック(プレビュー)
- 9 台本作成
- 10 選曲(BGM・SE 効果音)
- 11 スタジオ収録(ゲスト，ナレーションなど MA 作業)
- 12 仮編集
- 13 会議で試聴
- 14 本編集
- 15 完成，モニターチェック，放送局へ搬入
- 16 OA(放送)
- 17 反省会
- 18 取材先・ゲストに報告
- 19 アーカイブ作業(記録・整理のためダビング作業)

〈パイロット版を制作〉

番組イメージを知ってもらうことを目的に作成。パイロット作品は企画案の一つ「バイオ館が消える！」とした。沖縄出身の学生が、大学構内の建物の一つであるバイオ館が霧で消えるとの話を聞き、その不可思議な現象を取材し、亀岡住民と霧との日常生活における関わりを独自の視点で取り上げたものである。作品はKBS 京都担当者や学長、一部教員、スタッフなどで試聴した。

〈番組構成とフォーマット〉

キャスターに京都学園大学の学生でGBS 放送局の局長、武田慶美(当時3 回生)を起用する。番組構成は、取材したテープを編集し、内容に該当

するゲストをスタジオに招いて進行するスタイル。取材・編集・選曲・ミキシング・CM・ポスター作成と、すべて学生と市民による手作りで大学のラジオブースから発信する。

2010年 地域連携ラジオ番組フォーマット

「京都・丹波 DO(ド)！たんば Radio(レイディオ)」

「バイオ館が消えた！」

(14分プロ)

(音 声)

00：00

TM—CI

NA 京都学園大学プレゼンツ

「京都・丹波 DO！たんば Radio」

知らないまちの、あの話題。里山の向こうの、その不思議。

京都は広ーい。

あのまちの、ひと味違った姿を探しにゆこう、

京都・丹波の魅力発掘ステーション

TM—FO

〈前提供10秒〉

(この番組は京都学園大学の提供でお送りします。)

〈前 CM20秒〉

アナ 挨拶

M—CI

皆さん、こんにちは。亀岡にある京都学園大学の放送局からお伝えする「DO！たんば Radio」。私は放送局の局長を務めます武田慶美です。よろしくお願ひします。

きょうから始まりましたこの「DO!たんばRadio」はどういった番組かといいますと、京都学園大学の学生と地域の人たちが一緒になって京都・丹波エリアの魅力を伝えようと企画から取材・編集まですべて自分たちで行い、そしてその作品を大学内にあるラジオスタジオから発信していきます。

さて本日第1回目のスポットとテーマは「亀岡の霧」を取り上げます。亀岡をはじめ丹波は霧が多く発生するところとして知られています。

毎年11月から1月にかけて深い霧が発生します。その理由は土地と気候に関係するようですが、このスタジオがある京都学園大学でも、霧が出た朝は不可思議な現象が起きています。

このあたりを人間文化学部2回生の謝花友子さんが取材してくれました。

M—FO

ゲスト 謝花さん挨拶

Q 霧を取材することになった理由は……

A 学内にバイオ館があるが、その建物が消える？ との噂を聞いたことから、どんなことになるのか知りたくて映像におさめた。

アナ ではどんな作品になったのか。レポートをお聞きください。

作品「バイオ館が消えた！」 音生かし

- ・導入は学生にバイオ館が消える現象についてのインタビュー
- ・霧のメカニズムについて気象予報士・小原由美子さんにインタビュー
- ・消えた現象を実況レポートで再現

アナ 感想は

ゲスト 謝花さん

- ・苦労話(取材において。みんなと協力しあったこと)

- 感動(実は沖縄出身なので霧は初めて)

アナ 有難うございました。謝花さんは交換留学でこの1年を亀岡で過ごされました。

良い思い出になりましたね。ではお知らせの後には霧にまつわる生活についてお伝えします。

〈中 CM (20秒)〉

アナ 京都学園大学ラジオスタジオからお伝えしています地域連携情報番組「DO! たんばRadio」。きょうは「霧」をテーマにお送りしています。亀岡の霧は市民生活にも大きな影響が出ています。このあたりを亀岡市にお住まいの主婦岩本修子さんにお越し頂きお話を伺います。

ゲスト 岩本修子さん挨拶

Q 岩本さんは、亀岡での生活は？

A (亀岡に住んで……年)

Q 岩本さんにとって亀岡の霧はどのように受け止めておられますか？

A (やっかいなもの。洗濯物が乾かない。昔はもっと霧が深かったなどのエピソードを交えてお話ください)

Q 自転車での通学途中で深い霧に包まれ、困ったこともあるのですが

A (交通などにまつわるエピソードお聞かせください)

Q 霧から学ぶ生活での知恵とかありますか？

A (聖護院大根のお話、お聞かせください。霧のため直射日光を遮り、味わい深いおいしさに仕上がる)

〈後 CM (20秒)〉

TM—FI—BG

アナ アッという間に時間が来てしまいました。亀岡を包む霧は生活の中に深く関わっていることがおわかりいただけたでしょうか。山頂などの高い場所からは美しい「雲海」として見ることができ、それこそ隠れたスポットとして人気です。リスナーのみなさんもぜひ遊びに来ませんか。ちょっぴり現実離れした景色と出会えるはずですよ。岩本さん。

(PRを……)

アナ それではまた。次回の「DO! たんば Radio」をお楽しみに。

13:40

〈後提供(10秒)〉

(この番組は京都学園大学の提供でお送りしました。)

14:00

TM—FO(又は完奏)

(スタッフによる試聴意見・感想)

学生

- ・ゲスト二人がとても自然体でよかった。沖縄なまりや主婦の体験など実感が良く伝わった。
- ・収録自体は13分25秒、そこへ霧のテープを約5分を加えると18分以上で、実際の14分に収まらないのでは。
- ・龍尾祭のコメントは聞いている人にわからない。
- ・この番組に音楽を入れることをベースにするのか。……内容次第で臨機応変にすればどうか。
- ・少し早口か? ゲストに押され放し。次への展開などで言い方を工夫する必要があると感じた。
- ・冒頭のキャッチコピーが入ることはイメージとしても良い。
- ・CMが3回で2種類だったが、イメージとしてはそのくらいで良いが、学内広報のお知らせなどがあれば、適宜入れていけるか。
- ・ジングルがあったほうが良い。(後日制作した)

市民スタッフ

- 映像がなくても霧が出ているように感じた。逆にラジオを聞いて亀岡を見に行きたい感じがした。演出も面白かった。ウェブなどにつながれば良いと思う。
- 生活感、手作り感がある。コンセプトの地域連携もうたっている。小原気象予報士のモヤと霧の違いの説明などの情報を得ることが大きく、身近な番組となった。
- ジングルを入れたほうが中身とCMの線引きもできて良いと感じた。取材とスタジオの割合、どちらにウエートを置くかもあり、これからは意識したほうが良いと思った。
- 聞きごたえがあった。15分より20分は欲しいくらい。CMに学園大のインフォメーションを入れることも意識したほうが良いのでは。

君塚 番組の性格付けを明確にしたい。広報の立場から言えば、大学が提供番組を持つのは初めてでもあり、時間帯からしていかに若い人に聞いてもらうか。とって広報色を出すのもどうか。大人から若い人まで聞いてもらえるような仕掛けをしていきたい。

近藤 おおむねよくまとまっていたのでは。会話も自然でプロでもないアマでもない学生放送局らしい味が出ていて、聞く人も堪能してくれるのでは。霧のシーンは如何にも消えたと想像させるなど、まさにラジオの特性も生かされていた。番組の流れに学生インタビュー、ナレーション、効果音など変化があり、ラジオ放送の候補に挙げたい。ただTM曲など番組にふさわしい印象に残る曲にするなど工夫すればどうか。今後はこの作品を持ち歩いて全員でプロモーション活動を展開しよう。

以上の評価を得て、「バイオ館が消えた！」(仮題)をラジオ作品の候補に挙げることにした。

〈取材活動〉

当初は大学OBとGBS放送局が中心となって取材、5月半ばから呼びかけに応じた一般市民やゼミ生も参加した。企画に基づき、まず取材相手と交渉、OKが出れば構成を考え、企画会議で意見を求める。それを参考にして取材を始める。取材は2人から数名でカメラとマイク、三脚をもって行う。主目的はラジオだが、後々のテレビ放映・資料映像のことも意識して撮影も同時に行うこととした。取材は内容にもよるが1回で撮り終えることは難しく、2・3回を要する。

〈番組収録〉

取材を終えると担当者は仮編集を行い、仮台本を作成する。内容は近藤からスタッフに一斉配信し、言葉や表現にチェックが入る。これを経てラジオスタジオで収録が行われる。

ゲストが入る場合は、事前に打ち合わせを行い収録する。学生やゲストなどのスケジュールにあわせるため、収録時間が限られ、大体が夕方に行われる。後日、音声担当の上田氏(市民スタッフ)と担当者と取材編集したものとゲスト収録したものの一本化編集が行われ、音楽、効果音、CMも入れた作品にする。この作品は放送時間の制限を加えておらず、レギュラーの構内放送でも放送する。そして企画会議でも試聴し、意見を出し合い、修正を重ねて再度、KBS京都ラジオ番組用に仕上げる。

〈CM制作〉

CMもすべて手作りとして仕上げることとした。番組内でのCMチャンスは構成上20秒で3回が適しているということになった。これまで大学のCMはテレビ用はあったものの、ラジオ用はなかったため、GBSの学生にCMを考えさせることにした。何の特徴もなく、大学のイメージとして打ち出すには弱いという意見も出たが、とりあえず音にして作らせたと、男女の軽快な言葉のやりとりと音楽がマッチしており、逆に特徴の

ない文言が耳に残る出来映えとなり、好評を博した。

もう一つは岡崎宏樹准教授(国際ヒューマン・コミュニケーション学科)に大学のイメージ演奏作成を依頼し、情報提供という形で行う広告、インフォマーシャルとして学生生活一言インタビューと大学のキャッチロゴで構成した。

〈放送に向けての広報活動〉

10月からのラジオ放送に向けて、スタッフ挙げて以下の方法で広報活動に取り組む。

- 校内放送による告知(ラジオ・テレビ)
- 大学 HP 掲載
- GBS 放送局ブログ
- チラシ作成と配布(亀岡市内のイベントや地域活動に参加し配布)
- 亀岡市民新聞掲載
- ユーチューブ(放送一部を配信)
- ユーストリーム(収録風景を配信)
- KBS 京都ラジオ放送での番宣
- KBS 京都秋の新番組での記者発表
- 南丹市ケーブルテレビ⁽⁴⁾(園部町)での番組宣伝

〈KBS 京都ラジオでの番組放送〉

候補作品の中から企画会議で投票し、上位7作品を選んだ。

(放送された作品)

(1) 【亀岡の霧——11階建て校舎が消える!?!】10月3日放送

概要

亀岡をはじめ丹波地方は霧が多く発生するところで知られ「丹波霧」と呼ばれている。

毎年11月から1月にかけて深い霧が発生する。



消えたバイオ館



消える前のバイオ館

学生たちが学ぶ京都学園大学でも毎年この時期になると不思議な光景が見られる。それは入口にそびえたつ11階建ての巨大な校舎、バイオ館がすっぽりと霧に包まれ幻想的なイメージを醸し出すからである。

学生たちの間では「バイオ館が消える！」という噂がこの時期飛び交う。これを耳にした沖縄の交換学生が、実際どのようにして消えるのか自分の目で確かめたいと思い、ゼミ生と一緒にカメラにおさえ作品にしようと企画した。

沖縄では見る機会のない霧、バイオ館を覆う霧は彼女の目にどのように映ったのか。また地元の人たちが霧とどのように関わっているのか、霧が発生するメカニズムなど、学生目線でとらえた亀岡の霧の実像に迫る。

(2) 【保津川に生きる人】10月17日放送

亀岡盆地を流れる保津川は、京都市右京区京北町の上流から発し、宇治川、木津川と合流して淀川となり、大阪湾に注いでいる。

「保津川」は、おおむね亀岡中心部から嵐山までの呼称で、その他に「桂川」「大堰川」と呼ばれている。亀岡から京都まで、急流を舟で下る「保津川下り」は観光名所として有名である。嵐山までの約16キロを2時間かけて下っていく舟下りは、季節や水量によって、見えてくる景色が違い、年間約30万人の観光客が訪れている。海外からの観光客も多く、保津川下

りの魅力は国境を越えているといえるであろう。

この保津川に生きる船頭衆へのインタビューを通して、川をめぐる歴史や文化、現在抱える環境問題を、クイズ形式で紹介する。

(3) 【亀岡祭】10月31日放送

毎年10月に行われる「亀岡祭」は亀岡市最大の秋祭りである。23日の宵宮、24日の宵宮、25日の本祭と、3日間にわたって賑わい、本祭では11基の山鉾が巡行する姿から「口丹波の祇園祭」とも呼ばれている。

「亀岡祭」は、10年ほど前からの新しい呼称であるが、本来は上矢田町にある鍬山神社をまつる「鍬山神社秋季大祭」で、およそ600年前にまでさかのぼることができる歴史ある祭りである。

2010年は丹波亀山城築城400年と、亀岡市制55年が重なり、節目の年として、例年とは違った催しものや取り組みが見られた。祭りを支える鉾町の人たちの苦勞と、ボランティアでこの祭りに参加した京都学園大学生の声を聞いてきた。

(4) 【美山町——ふるさとの原風景】11月7日放送

京都市内から車で1時間半、美山町は京都府南丹市の北部、福井県との県境にある。山に囲まれ、清流や滝、夏にはホテルも数多く見られ、特別天然記念物のニホンカモシカも生息する自然豊かな町である。この美山町・北村の、通称「かやぶきの里」には全国でも例のない38戸もの茅葺き屋根の民家が残っている。そこはまさに日本の「ふるさと」。初めて訪れた人もなぜかなつかしさを感じてしまうようである。

なぜなつかしさを感じるのか？ それを探るために現地を訪れ、茅葺き職人さんに茅を切る音を聞かせてもらったり、地元の合唱団のみなさんに古くから伝わる子守歌を歌っていただいた。

(5) 【星に近い郵便局】 11月21日放送

京都府内でいちばん星に近い郵便局、つまりいちばん高いところにある郵便局が、ここ亀岡にある。

亀岡と大阪を結ぶ国道423号線沿いに位置する亀岡西別院郵便局。市内から車で約20分のこの郵便局は海拔378mの高さにあり、星型をしたユニークなその建物とともに、「星に近い郵便局」として有名である。建設に立ちあった元郵便局局長さんのお話をはじめ、現在の局長さん、また地元の人のお話を通して、「星に近い郵便局」にまつわるちょっとステキな話を紹介する。

(6) 【ジョン・レノン——丹波に流れた転機の時間】 12月5日放送

12月8日は、ジョン・レノンの命日。2010年は生誕70年、没後30年という大きな節目の年でもあり、今は亡きジョン・レノンに、各界から大きな注目が集まった。1970年のビートルズ解散後はソロとして活動し、あの「イマジン」をはじめとするたくさんのヒット曲を生み出した。1975年に息子のショーンさんが生まれると、音楽活動を一時中止。「ハウスバンド」宣言をし、ほとんどの時間を家族と過ごすようになり、1980年の復帰直後、ニューヨークの自宅前でストーカーに銃で殺害された。実は、そのレノンが、音楽活動の休止時期に、亀岡の地を訪れていたという。ジョン・レノンとオノ・ヨーコの丹波探訪の真実を探る。

(7) 【丹波のことば】 12月19日放送

方言は、人の温かさがにじみ出てくるような気がする。同じ意味の言葉でも、方言を使うことによって、相手に与える印象もずいぶん変わってくる。しかし最近、丹波にかぎらず、方言がどんどん失われていって若い人たちが理解しにくくなっているように思う。私たちは、これからの方言をどのように捉えたらよいのであろうか。そこで今回は、地元である「丹波のことば」に着目し、その特徴はどういうものなのか？ どのように使わ

れているのか？ 「丹波のことば」の不思議と魅力に迫ってみた。

〈番組に対する反響・感想〉

KBS 京都の番組審議会委員の議事録から

(「亀岡の霧」と「保津川に生きる人」⁽⁵⁾ 2 作品を審議)

- ・地域ならではの味が良く出ている
- ・情報を消費していく番組が多いが、これは地域情報を蓄積でき、番組は財産になる。
- ・大学生が制作に関わった番組を何作品か聞いてきたが、これが今までで一番よかった。
- ・いろんな地域と向き合い、地域の声をラジオに活かしながら大学と連携をとって欲しい。
- ・テクニックよりも初々しさが感じられて良い。
- ・地域の温かい協力が感じられる。
- ・大学の放送局の制作と言うことで、はじめは素人の練習を聞かされている気がして「かなわんな」と思ったが、聞いている内に不思議にそういうことは気にならなくなり、むしろ一種の「ういういしさ」と「けれん味」のなさに好感をもった。
- ・産学連携や地域活性の名のもとに、放送自体の公共性や中立性が少しでも損なわれることがあるとしたら問題と思う。そういう問題意識を持つことも大事。

〈プロジェクトメンバーの感想〉(全作品)

- ・自分たちの関わった作品が放送で流れるのはうれしい。
- ・聞ける形になってよかったと思った反面、もう少し番組制作に関わりたかったと思った。
- ・手作り感があって、温かみのある番組になったと思う。
- ・短時間に多くの内容を盛り込み感心した。

- 自分の携わった番組が、世に出るとうれしい。感慨ひとしお。
- 改めてストーリーは大事だなと感じた。編集時に加える BGM できらりと世界観は変わるなと思った。

プロジェクトを通じて学んだこと・得られたこと

プロジェクト終了後のアンケート調査の結果から

- 身近な地域の知らない一面を知ることができたこと。自分たちが住む町の様子を改めて見直し、発見や感動で故郷に愛着を持つ大切さを知った。
- 市民との交流、コミュニケーションの難しさ。
- ラジオ作品作りの基本を学んだ。
- ラジオが持つイマジネーション世界の魅力に気がついた。
- コミュニケーションを重ねることで地域住民の興味、関心がわかった。
- 地域に住んでいるゆえの知恵を学んだ。
- 亀岡、丹波地域のあまり知られていない場所を知ることができ、その地域の人と触れ合うことができた。
- 番組を作る難しさを実感し、今まで何気なくテレビの見方が少し変わった。
- インタビューで答えてほしいことと違う答えが返ってきたので、自分の意図したことを伝える難しさを知った。

一からの取り組みは時間も手間もかかるが、それだけに得た喜びはひとしお大きいものがある。プロジェクトの意図である地域住民との連携を高める、コミュニケーション能力を高めることにおいて、ある程度の成果が見られた。また番組制作を体験することで今までの受信者側から発信者としての視点を意識するようになり、メディアリテラシーを育むきっかけにもなった。今後は人から人へのつながりが、世代を超えてより一層深まり、

大学と地域との強い連携によって素晴らしい発想力と創造力、そして行動力が実を結ぶことを期待したい。

課 題

プロジェクト終了後のアンケート調査の結果から

市民側

- テーマの提案は市民側に偏ってしまうため、学生の主体性に欠ける点。
- 市民スタッフの発掘。
- 番組内容のクオリティを高める。
- 限られた時間で作り上げる難しさ。
- どうしたら多くの人に番組を知ってもらえるか。

学生側

- 打ち合わせ時間が限られた中で、互いのスケジュールの調整や、内容のクオリティを高めるのは難しい。
- シリーズ化できるほどの亀岡・丹波地域のネタ集め。
- 参加メンバー(学生・市民)をどうやって増やすか。
- 地域の人の年齢層を広げる。
- GBS 放送局をもっと全体的に引き込む。
- 学生側からの企画を増やす。

一番のネックは、取材する側の限られた時間での調整であろう。参加する市民も仕事を抱えており、学生も授業やバイト、クラブ活動など多岐にわたって活動している。プロジェクトは、その中の一環としても含まれてはいるものの、結局は取材相手のこともあり時間調整が難しい。そのためには、それをサポートするための体制が必要である。市民や学生スタッフが多くかかわることで、その点はクリアになるかもしれないが、半面、人頼み、自分の作品としての責任感の希薄につながる心配もある。現在は市民から企画案のアドバイスをもらい、番組制作、編集作業は学生が携わる

ことが多いので、学生に負担がかかっている。しかし、2年目に入り市民が制作のノウハウ、スキルを身につけていけば、学生との連携がさらに深まり、市民スタッフの熱意が学生に伝わるものと期待する。

その他ラジオの放送時間帯、番組のターゲットをどこに置くか、レスポンスをどう番組に反映させるかを検討する。ネットラジオ Radiko⁽⁶⁾(ラジオ)を活用した展開を依頼する。

今後の展開

地域メディアを活用したこのプロジェクトの取り組みに賛同し、CSテレビ番組「目で聴くテレビ⁽⁷⁾」を制作する大阪のアステム社と亀岡市に隣接する南丹市ケーブルテレビから作品提供の依頼があった。これらに応えるべく、ラジオ作品をテレビ作品に作り替えていくことも可能となる。これらの作品が上記の地域メディアやユーチューブを通して発信されることは、大学と地域のイメージアップを図る上で意義は大きいと考える。

また今後のプロジェクトの取り組みとしては、地域への理解と協力を深めるため、これまでの16作品をアーカイブ化し、行政の施設や観光施設での活用を呼びかける。そして、これまでの1年間の取り組みをまとめた報告書⁽⁸⁾を作成し、取材先・官公庁・教育機関に配布する。

おわりに

何事においても初めてづくしでスタートしたプロジェクトであったが、1年間の活動、取り組みを通して、大きな意義があった。まず第一に地元市民にとってのふるさと再発見である。市民は、地元意識が強く、しかも住んでいる町に愛着感や誇りを持っている。それは亀岡という地が、長い日本の歴史から見ても、外から侵されることなく、自らが守り抜いてきた

という強い自負心とそこから育まれた高い自治意識の表れがあったのではなかろうか。今も隣の京都ばかりが注目され、常に京都の奥座敷などといわれ、後塵を拝さなければならなかった感がないでもない。それだけに今回のプロジェクトの取り組みは、町の再発見と外に向けて発信していくことにつながり、大きな意味を持っていたわけである。

次に学生にとっては亀岡での学びの場を広げ、市民との交流の機会を得たことである。プロジェクトの参加者である市民の強い情熱は、学生たちにも伝わったと確信している。必ずしも学生はこのプロジェクトに初めから積極的であったわけではない。亀岡を学ぶには良いきっかけと前向きに受けとめる学生もいれば、一般の人と作ることへの不安を持つ学生もいた。一方、市民側は、地域作りには学生との連携が必要であり、お互いに情報交換をすることや情報発信と収集のノウハウを学びたいと意欲をのぞかせていた。月2回ペースの会議を重ねることで、作品の目標が一つの方向にまとまり、定まっていった。学生たちは、城下町がどこにあるのか、町の特性は何なのか。祭りなどの歳時もあまり把握していなかったものの、地元市民だからこわかる深い情報提供に次第に耳を傾け、取材のノウハウ、撮影に至る段取り、取材先へのアポのとり方と、これから学生たちにとっては、社会で必要とされるであろう能力を着実に身に着けていった。我々も日ごろ学生と接する中では発見しにくい、彼らのポテンシャルを知ることとなった。

プロジェクトは大学のバックアップもあって2年目に入った。学生は卒業生と一部入れ替わり、市民も新たな方に参加していただくなど少しずつ輪が広がった。ラジオ番組「DO!たんばRadio」も徐々に知られるようになった。これも1年間の取り組みの成果といえるであろう。会議でも以前にもまして意見が積極的に交わされるなど充実してきた。番組内容や取材の手法も、自らのスキルを顧みず、高度なものを求めるなど、頭を痛める面も多少あるが、これも参加意欲の表れと深く感謝している。

今はまだ新鮮ムード。市民はこれまでの町の常識が、以外に知られてい

なかったことに気づき、発信することの必要性を再認識している。学生には新鮮な気持ちで、若さを前面に打ち出し、より地域に密着した企画を打ち出してほしいと願っている。そして多くの人に、この市民と学生によるコラボの取り組みが理解され浸透することを切に願ってやまない。

注

- (1) 大杉卓三著『大学の地域メディア戦略』2010年 中国書店 p.82～90 p.95～100 p.125～130 p.134～138から抜粋。
- (2) NPO 京都コミュニティ放送が運営する日本初の市民が主役の放送局。高校生、大学生、主婦、ストリートミュージシャン、商店主、障害者施設の職員など、素人の市民が多様な放送をしている。
- (3) 砂利・水滴・ししおどしなど京都・丹波の音で作った音楽。
- (4) 南丹市の難視聴地域の問題を解決するため、南丹市では地上デジタル9波、FM4波、衛星(BS)9波を南丹市情報センターで一括して受信し、ケーブルを通じて再送信。地域情報・防災情報・公共機関情報を目的に自主放送(11チャンネル)をケーブルネットワーク経由で放送。
- (5) 放送法により、放送局から委託を受けた有識者が、放送番組が社会の常識に照らして妥当なものであるかを審議する機関。
- (6) Radiko(ラジコ)は難聴取エリアの解消、ラジオの聴取機会の拡大、若年層対策を目的とする。ラジオ放送をインターネット(パソコンやスマートフォン)で聴くことができる。「DO!たんばRadio」は2011年10月からKBS京都のRadikoで放送。
- (7) 聴覚障害者向けCSテレビ放送。95年の阪神淡路大震災を教訓に聴覚障害者にとってテレビ情報は不可欠として手話と字幕をつけた放送がスタートした。現在3つの媒体(CS・ケーブルテレビ・地上波U局)で放送されている。
- (8) 京都学園大学・地域連携ラジオ番組制作プロジェクト『京都・丹波DO!たんばRadio』報告書。16作品の概要とエピソードを掲載。放送された7作品はCDに納めた。2011年3月作成。

参考文献

- 大杉卓三著『大学の地域メディア戦略 映像番組制作による大学の地域貢献』
2010年 中国書店
- 日本民間放送連盟編『放送ハンドブック新版』 1997年 東洋経済新報社
- 『調査情報』2008年9・10月号, 2009年7・8月号 TBS
- 『月刊民放』2007年2月号, 2009年9月号 日本民間放送連盟

